
慈 恵



平成28年 夏季号

No.55

宗教法人 慈 恵 院 付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



恬^{てん}
虚^{きょ}

天龍滴水書

この書は、伸び暢びとして柔らかく、しかもゆったりとして、格段の円熟味を増す。

「恬虚」とは、心が静かで無欲なことだが、なるほどそんな雰囲気を表わすということとは、そんな心の状態が、この語を用い、この表現となったのであろう。「天龍滴水書」も、前者よりスッキリとし、より光る。こんなところからして、六十歳代の書であろうか。

「禅画報」より

「し」の字

三条の成田屋は日ごろ良寛と親しかった。ある時、成田屋が、生涯の宝となるようなものを書いてほしいと依頼した。すると、良寛は全紙に「し」の字を書いた。成田屋がげげんな顔をして、

「これはどういう意味ですか」

とたずねると、和尚いわく、

「し」は死ぬことじゃ。人は死ぬことさえ忘れねば大した過もなからう」

「禅門逸話集成」より

良寛 りようかん
(一七五八〜一八三二)

江戸後期の禅僧・歌人。俗名山本栄蔵、号は大愚。越後の人。諸国を行脚の後、帰郷して国上山くがみやま五号庵に住。性恬淡(てんたん)、村童を友とし、高潔の人格を敬仰された。書を以て知られ、また漢詩・和歌にすぐれた。弟子貞心尼編の歌集「蓮(はちす)の露」などがある。

夏 じよみ

8 月	7 月	6 月	
<p>8 / 14</p> <p>盂蘭盆会 (旧盆)</p>	<p>7 / 17</p> <p>盂蘭盆会 (新盆)</p>		当山行事
<p>8 / 23</p> <p>処暑 (水原秋桜子)</p> <p>8 / 7</p> <p>立秋 ●みんなん蟬立秋吟じ いでにけり</p>	<p>7 / 22</p> <p>大暑 ●兎も片耳垂るる 大暑かな(芥川龍之介)</p> <p>7 / 7</p> <p>小暑 ●小暑なほ降りつく梅雨のおくれ哉(二月堂)</p>	<p>6 / 21</p> <p>夏至 ●夏至の雨山ほととぎす 聴き暮し(田村木国)</p> <p>6 / 5</p> <p>芒種 ●くちなしの花咲きぞめし 芒種かな(三木)</p>	二十四節気
<p>8 / 15</p> <p>終戦記念日</p> <p>8 / 9</p> <p>長崎原爆の日</p> <p>8 / 6</p> <p>広島平和記念日</p>	<p>7 / 19</p> <p>土用入り</p> <p>7 / 18</p> <p>海の日</p> <p>7 / 15</p> <p>中元</p> <p>7 / 7</p> <p>七夕の節句 (七夕)</p> <p>7 / 1</p> <p>半夏生</p>	<p>6 / 19</p> <p>父の日</p> <p>6 / 10</p> <p>入梅</p>	祝日等

「こよみ事典」東京美術 参考



慈恵院との愛犬・愛猫 からのご縁に感謝

府中市 一参禅者(83)

昭和四十八年、私は府中市に引っ越して参りました。本当に住みやすい緑の街ですが、まさか犬猫の霊場まであるとは驚きでした。現在までに昭和五十九年から三匹の愛犬と一匹のペコというシャム猫の霊を祀って頂きました。鈴姫・雪姫夫々十二年の天寿を全うした柴犬親子、牝のシャム猫ペコは丁度私が単身赴任で五年間留守をしていた間、家内の話し相手と言う大役を果たして呉れました。柴犬達

とも仲良しでした。玄関にお迎えをする利口な潔癖症で、最後まで砂のトイレに行こうとしたいじらしい姿は悲しい思い出です。

そして十六才で一昨年夏に逝ったシーズ犬のミニチャン。思えば府中の新しい家で、二人の子供の情操教育にと、柴犬を飼い始めた訳でしたが、今はその子らも大学に通う孫達の親になって、最後のミニチャンこそ老夫婦二人の毎日の支えになって呉れていたのです。そのミニチャンとの思い出の区切りを付けようと大晦日、除夜の鐘を撞き修正会を終えた帰途ふと境内の坐禅会の案内が目にとまりました。そして新年に入り二月から朝六時半からの坐禅会に入会させて頂きました。爾来、まる二年がたち三年目に入りましたが、実はいま夫婦に新しい猫ちゃんを毎日楽しく且つ手間と

心配を掛けさせています。福ちゃんと言う茶トラの牝です。矢張り夫婦二人の毎日はマンネリになって、耳が遠くなつたこともあり、不協和音も多くなりもう一度、散歩は避けて猫を飼いたいと思ったのですが、この福ちゃんを手に入れる迄には、老人家庭敬遠と言う難関など一苦労と、最後には坐禅会の先輩のご紹介で、しかもミニチャンの三回忌に当たる、去年の七月にわが家の家族に決まった、不思議なご縁がありました。

のテーマを決めて例えば通勤通学路等や、心を横切った人達との懺悔、笑いなどを走馬灯のように駆け巡らせるうちに、最近はテーマが段々絞られて来て、唱えるお経も少しづつ勉強して、作務の傍らに愛犬愛猫にお線香を上げて、福ちゃんとの近況を報告するなど時が過ぎていきます。実は今年八十三の誕生日を機会に、運転免許の返上、丁度十六年乗った車の車検切れに合わせて六月以降、慈恵院への足がなくなりません。二月の涅槃会で須弥壇に飾られた涅槃図には、お釈迦様を慕う人間だけでなく、もろもろの動物たちが哀しみのため集まっていた様子が描かれています。参禅出来なくなるに当たって愛犬・愛猫のご縁から慈恵院で坐禅と、白隠禪師坐禅和讃等の読経が出来た感謝感激です。

松浦江実子(64)

あかりの消えない一つの部屋、家族が床につくと同時にあかりを灯す。十五年間一日も絶えたことはない！不思議な、無気味な？。

それは白い猫、早苗ちゃんのためなんだ。耳の不自由な彼女はとても臆病で、とつても可哀想、生れて三ヶ月頃に我が家に来たのだが夜になると大声でギャーギャーと怒鳴っているかのように鳴く。変？自分の耳には届く届くはずのない声でありつた力の限りに鳴く！！ハタと気づき明りのついた一つの部屋に箱を置いて寝床にしてあげたら、その眼は、まんじりともしないで朝まで、じっとおし黙っていた。ははーん、この白い猫ちゃんも耳が不自由なんだと、

家族で知恵を絞り、早苗ちゃんが一番に安堵する方法として一つの部屋の明りを夜の間にずつとつけておくことにした。語ればいろいろの猫との生活だが、十五年間ずつとこの猫の為に我が家のあかりは一つの部屋が幸せ色のあかりを灯し続けているのである。

供養の方法

小平市 平野 佳美(78)

彼岸過ぎに猫の墓参りをした。府中の動物霊園にある。彼岸会の間は霊園が混雑して高齢者は、とても歩けない。法要まで一時間ある。人と動物との納骨堂『大悲殿』に行つた。ここに、私と猫の墓がある。仏壇の六匹の猫の写真に線香を上げた。仏壇に隣

接しているロッカーの上段は私の遺骨を納める場所だ。下段には猫の骨壺六個が納めてある。

現在七匹目の猫ナナと暮らしている。ナナは十二歳。人間ならば六十歳に相当する。ナナを残しては逝けない。どうしよう。ナナの葬儀を済ませ、この墓の前で、心臓麻痺でばったり死ぬことが望みだ。

わたしの墓の真向かいに本橋マリアさんの墓がある。ロシア貴族の出身で、ロシア革命の亡命者だそう。外交官・本橋さんと結婚したのだが、

なぜか、三匹の猫と一緒にこの墓に葬られている。二十年前、朝日新聞のマリアさんの記事を読んで、私は大悲殿のことを知った。新宿の有料老人ホームから、マリアさんは三匹の猫の墓参りに度々来ていたが、亡くなってからは、

誰も一度も供養に来ないそう。私がこの墓を購入した二十年前はガラガラだったのだが、現在は満杯で、第二の大悲殿を増築した。

待合室に母親と五十代らしい息子がいた。供養は犬か猫かと聞いてみた。

「犬の二十三回忌です」の答えに驚いた。動物の死は親族の死より悲しいと、彼は呟いた。私は大悲殿の六匹の猫のことを話した。ナナと私の現在の心配ごとと、私の死の望みも話した。彼は即座に答えた。

「それはダメだ。供養をする人がいなくなる」

私は猫の供養のために長生きをしなければならぬ。法要の経を聞きながら猫たちのそれぞれの臨終を思い出した。契約では本人没後は永代供養になっている。